Ⅱ－1　自然保護

まちづくりでは自然保護を図ることが重要な課題のひとつになっている。その意義は、地球環境問題対策やヒートアイランド対策という面ばかりではなく、人間が人間を回復するという面にもあるように思われる。それをつきつめて考えていけば、まちがまちとして存在しているか否かを決定するところにも行き着く。まちにおける自然のカタチは貴重なメッセージを発している。

Ⅱ－1－1　私が支える公というカタチ　神奈川県鎌倉市

鎌倉市は自然と歴史が豊かなまちである。鎌倉駅前方の広い海、市街地を抱え込むように背後に迫る山。市のかなりの部分は風致地区であり、また、歴史的風土保存区域、歴史的風土特別保存地区、近郊緑地保全区域も中心部を取り囲むように配置されている。鎌倉駅から商店街の坂道を上ればまもなく鬱蒼とした緑を目の当たりにすることになる。一方、中心市街地では神社仏閣に限らず様々な時代の数多くの歴史的建築物を目にすることができる。

このような鎌倉では観光客が年々増加し、近年では市民と観光客との間で摩擦も見られるようになってきた。また、自動車交通の増加により市民の静かな生活が侵されるとともに、歩行者の安全性にも大きな支障が出るようになってきた。そこで市は「市民・来訪者が快適に過ごせる古都鎌倉の環境整備」を行って古都を「再創造」することを重要な施策として掲げ、駅東口の整備を進めるとともに、西口についても市民主体の検討を通じて歩行者優先の環境整備を行うこととなった。ところが一方、駅周辺とは別の場所で、古都の自然を著しく減退させる開発が民間事業者等により行われようとしていた。

問題の舞台となったのは鎌倉市西方に位置する「広町緑地」である。これは首都圏にありながら豊かな生態系と里山の特徴とを残す極めて貴重な緑地であるが、複数の民間開発事業者の所有するところとなり、住宅団地開発計画が高度経済成長末期の 1973 年およびバブル経

鎌倉駅前から商店街（小町通り）を抜けるとすぐに緑地になる　2005 年 12 月撮影（次も同じ）

御成商店街にある「旧安保小児科医院」（大正 13 年頃の建築、鎌倉市景観重要建築等第 16 号、現在は「財団法人鎌倉風致保存会物の事務所（「鎌倉風致舎」）として用いられている。

済末期の1989年の2度にわたり持ち上がった。これに対し地元自治会や様々な市民組織が粘り強い反対運動を展開し、2003年10月に鎌倉市と民間事業者との間で市による買収が合意された。鑑定士の見積もりを遥かに上回るその買取額に関しては環境保護を訴える市民団体からも強い反論があったが、最終的には国や県の補助も受けて市が時間をかけて買い取ることとなった。

市は約 48ha（緑の基本計画の広町地区約60ha の一部）を都市公園の種別のひとつである「都市林」として保全することとし、市民の意見を踏まえて2003年12月に「(仮称）鎌倉広町緑地基本構想」を策定した。それには基本方針として①自然環境の多様性の保全、②貴重種・注目種の保全、③古都のイメージを支える緑地景観の保全と緑地内の里山的な景観の保全、④自然環境の資源としての活用、⑤鎌倉らしさ・広町らしさの活用、の5つが掲げられている。

一方、これまで様々な団体により森の手入れや田んぼの活用などが行われてきたが、2007年1月には8つの市民団体（鎌倉の自然を守る連合会、鎌倉広町・台峯の自然を守る会、鎌倉もののふの道グランドワークトラスト、鎌倉広町の森市民協議会、広町自然観察の会、広町田んぼの会、広町畑の会、広町森の会）が「新・市民懇談会」を組織して活動内容を協議していくこととなった（3ヶ月に1回の開催予定)。

以上のように、鎌倉市では市民が主体的に自然環境を守ってきている。鎌倉市の緑豊かな住宅地では、「目に青葉　山ホトトギス　このかん境の破かいを許すことは　かまくら市民のはじである」という看板を目にすることもある。

広町緑地　2007年4月撮影（次も同じ）

腰越地区の住宅地

Ⅱ－1－2　住民が守る小さな生き物　神奈川県横浜市（舞岡公園）

鎌倉市の例に見るように、日本のまちの環境は私から発する公が支えてきた。そこに公を軽視する別の私が入り込むということもしばしば生じてきた。そしてそちらの私が強くなると私の利益が優先されてまちは景観も社会も破壊されるということが各地で起きてきた。まちが存続し得るか否かはひとえに私が支える公の大きさにかかっていると言えるかもしれない。そのようなことを考える上で、横浜市舞岡公園の事例は大変参考になる。

舞岡公園は横浜市戸塚区（一部は港南区）に位置する面積約 30ha の都市公園である。行き方はいくつかあるが、一番わかりやすいのは市営地下鉄の舞岡駅から徒歩で行く方法である。舞岡駅を出て南へまっすぐのびる道を 25 分ほど歩くと舞岡公園に着くが、着くまでの地区は「舞岡ふるさと村」になっている。これは景観豊かな農業地域を市が「横浜ふるさと村」のひとつとして指定したものであり、地区内には農業生産施設、研修施設、レクリエーション施設等が整備されている（面積約 102ha、関係農家 56 戸）。中心施設は総合案内所「虹の家」で、展示コーナーのほか研修室、料理実習室等がある。地区内で収穫された野菜等は「舞岡や」で販売されている。また、「ハム工房まいおか」では手作りハムなどが販売されている。都市の市街地の中にこのような空間があることは都市と農村との交流を深める上で、また、都市の人々の心を土につなぎとめて健全に保つ上で極めて重要なことである。東京の都心にもこのような地区をつくれば、人々の生活の潤い度は格段にアップするかもしれない。

「舞岡ふるさと村」のせせらぎと花と緑が美しい小径（市民が手入れをしている）をたどると、やがて舞岡公園の入口にたどり着く。この公園は都市公園には極めてめずらしく「谷戸」（低地の田んぼとその周りの雑木林で形成される場所）の風景を残す里山公園であるが、その実現には紆余曲折があった。

舞岡公園の周囲には戸建て中心の大規模住宅団地が広がる。舞岡公園の山林も 1970 年代には民間開発事業者の所有となっていた。横浜

「舞岡ふるさと村」　右奥が「虹の家」
2007 年 3 月撮影（以下同じ）

舞岡公園の谷戸の水辺

市は公園計画を策定していたが着手できないでいた。しかし舞岡台自治会を中心とする市民多数から早期実現の陳情書が 1979 年に出されたことから市は用地買収を進め、1982 年に「舞岡公園」として都市計画決定した。

その頃には舞岡公園予定地の自然に関心を持つ市民が増えており、1983 年に「まいおか水と緑の会」が設立された。同会は市に対して舞岡公園を谷戸を保全するものとするよう要望書を出すとともに、土地の一時使用を要望し、それが認められて同会が山林や田んぼの手入れに乗り出すこととなった。

公園整備の事業開始後、工事内容に自然を大きく改変してしまうような部分があって市民等から異論が出て設計が変更されたり、農業体験施設の配置の仕方で大議論がなされたりするなど、市当局・市民等の間で 10 年に及ぶ熱心な議論・調整等が続いた。そして 1993 年 6 月の開園にたどり着いた（浅羽良和『里山公園と「市民の森」づくりの物語』（はる書房、2003 年）を参照）。

こうして出来上がった舞岡公園にはいくつもの水源が保全され、地区中心には「上のたんぼ」「中のたんぼ」「下のたんぼ」という長く大きなたんぼが整備された。また、丘の上には移築された古民家（明治後期の建築）を中心とする「小谷戸の里」が設けられ、農業体験や自然観察会などの拠点となった。ここは「舞岡公園田園・小谷戸の里管理運営委員会」が指定管理者であるが、また、数多くのボランティアが活動を支えている。

舞岡公園は市民の貴重な憩いの場となり、また、田園体験の場となった。園内には景観形成のためにわざわざダミーの木製電柱が立てられたりしているので、景観のあり方を学ぶための格好の場ともなっている。また、生き物の大切さを学ぶための施設も充実しているので、都市の子供がぜひ定期的に訪れたい場ともなっている。

広がる田圃

「小谷戸の里」

Ⅱ－2　食と農

食は全ての人にとって必要なものである。生活の豊かさを実感させるものであり、故郷の美しさを感じさせるものであり、人々のつながりをつくるものである。食を支える農に人々が関わる機会を持てば、それらは著しく増幅され、社会的共通資本の醸成に大きく寄与することになる。そのような視点で、すなわち経済効率論ではない視点で、食や里山、農地を考えることが求められている。

Ⅱ－2－1　人々の明るい集いを故郷の食から　東京都新宿区歌舞伎町

歌舞伎町はこのところ大きく変化している。「歌舞伎町るねっさんす」のフラッグがいたるところに掲げられ、「白看板」（違法な店などが退去して空室になり看板が白く塗られたもの）が増えている。歩道を拡幅する道路工事など環境改善のためのハード整備も進められている。歩いてみれば声をかけてくる様々な人がいることもあるが、気の毒になるくらい遠慮がちな姿になっている。歌舞伎町は危険なまちというイメージが薄らいでいる。そして 2007 年 7 月には日本各地の物産を扱うアンテナショップ「ふらっと新宿」がオープンした。実に明るく健康的な店である。店の看板にはいわゆるルンルン気分の文字とキャラクターが描かれており、ふらっと入ってみたくもなる。このキャラクターは、同店のスタッフによれば、早くも大人気である。

変化の画期となったのはそれまでの諸活動を集約して 2005 年に打ち出された「歌舞伎町ルネッサンス」である。同年 1 月に地元関係者、自治体、省庁、有識者等が集まり「歌舞伎町ルネッサンス推進協議会」の第 1 回が開催され、「歌舞伎町ルネッサンス憲章」が発表された。この憲章は、①新たな文化の創造・活力あるまちづくり、②アメニティ空間の創造、③安全・安心な美しいまちづくり、の 3 つの柱を掲げている。これからもわかるように、歌舞伎町の取り組みは単なる治安対策ではなく全国の範ともなり得る総合的なまちづくりである。

歌舞伎町ルネッサンスは、①クリーン作戦プ

各所にはためく「歌舞伎町るねっさんす」の旗
2007 年 2 月撮影

「ふらっと新宿」入口
2007 年 7 月撮影（以下同じ）

ロジェクト（違法営業等の取り締まり、路上看板撤去、夜間巡回等）、②地域活性化プロジェクト（映画祭支援、オープンカフェ等の実施、広場の活用等）、③まちづくりプロジェクト（憲章の推進、現況調査等）の 3 本柱から成る。また、これらを総合し、①で増えた「白看板」へのテナント誘致、環境整備等を行う「喜兵衛プロジェクト」が 2006 年 2 月に設立された（終戦直後からまちの復興に尽力した鈴木喜兵衛氏にちなむ）。「ふらっと新宿」もその一環としてオープンしたものである。

歌舞伎町のまちづくりの基本的な考え方は、まちを単なる消費の場ではなく企画・生産する場にすること、上からの取り締まりではなく産業を下からつくることでまちを再生させること、まちの人々自らが覚悟を持って自発的に取り組むこと、等であるが、自発性は既にフリーペーパー『歌舞伎町るねっさんす』にも現れている（地元の人々が区の援助なしに広告収入だけで発行している）。「喜兵衛プロジェクト」としては 2007 年度にタウンマネジメントを検討し、2008 年度に組織を立ち上げる方針である。その方式としては「家守方式」（大家さん的世話人が中心になり複数賃貸物件を統一的に経営）の導入が検討されている。

さて、「ふらっと新宿」であるが、これは障害者の社会参加（販売員等として）をも企図して「チャレンジワーク」（新宿区障害者就労福祉センター）が運営するショップ（空き店舗利用）であり、宮崎県、山形県、群馬県、石川県白山市、岐阜県下呂市、東京都等の特産品を販売している。今後全国から様々なテナントが歌舞伎町にやってくる可能性を考えると、ここは「家守」とともにまちの人々の心を結びつける場になるはずである。スタッフから各地の特産品の説明を聴くだけでも楽しく、味わえばさらに郷土を感じる（伊那市イチゴジャム、宮崎県地鶏炭火焼パック、東京駄菓子など）。ということで中山弘子区長は「広報しんじゅく」2007 年 7 月 15 日号のコラムに、「地方と新宿を名産品でつなぎ、夏祭りと同様に懐かしさを運ぶことと思います」と書いている。

「ふらっと新宿」の明るく爽やかな店内
1 階入口付近

同　2 階

Ⅱ－2－2　食と農でまちをつなぐ　山梨県北斗市（旧小淵沢町）

現在は北杜市の一部になっている旧小淵沢町は、八ヶ岳南麓に位置する縦に長いまちである。標高差は北端と南端との間で 2,100m もあることからヨコ方向の生活圏が形成され、タテ方向の人々の交流はあまりなかった。このような状況を変えるため、1994 年に策定された「緑の活性化構想」では「緑の循環：タテ機能の連携と再発見」が重要なテーマになった。そして同時期に策定された「森林文化村構想」に交流拠点の整備が盛り込まれ、まちのセンター施設として「スパティオ小淵沢」が建設された。これは「食と健康をテーマに、都市と農村の活発な交流を目指した保養施設」であり、温泉、宿泊施設、レストランの機能を持つ。また工芸などが体験できる「スパティオ体験工房」が併設された。

「スパティオ小淵沢」の「食」に関しては地元の食材を活かすことが重視され、地元の婦人グループやコンサルタント等を中心に薬膳が開発された。そしてそれをもとにしたメニューが施設内のレストランで提供されることとなった。

一方、小淵沢町では遊休農地の増大が大きな課題になっていた。そこで 2003 年に構造改革特区が適用され、「NPO 法人グリーンライフこぶちざわ」が都市住民と地域住民との協働による「小淵沢ブランド」の生産等を促進することとなった。また、地域再生計画に基づき、「スパティオ小淵沢」やそれに隣接する「道の駅小淵沢」（農産物直売コーナー、レストラン、工房等）、さらに遊休農地を活用して開設した「花パーク　フィオーレ小淵沢」（花園、昆虫美術館、体験工房、レストラン等）の施設の充実を図るとともに、それらの連携を図ることとなった。

以上のような取り組みは、昨今の市町村合併でまちの中の地区間連携が大きな課題になっている多くの自治体にとって大変参考になるものではないかと思われるが、その視点での検討は別の機会に譲ることとし、ここでは「食」を中心に各施設を回ることとしたい。

JR 中央本線小淵沢駅の改札口は駅の南側に

「スパティオ小淵沢」
2007 年 4 月撮影（以下同じ）

「花パーク　フィオーレ小淵沢」

あるが上記諸施設は駅の北側にあるため、駅前の道を左へ進み左折して線路を越え豊かな里の風景を眺めながら北上する。中央自動車道に突き当たったところで左折して道路沿いに少し進み、右折して高速の下を潜るとその右手に「フィオーレ小淵沢」がある。駅から約 1.5km の登り道である。「フィオーレ小淵沢」の土地はもと 52 枚の段々畑であったが、今は 16ha の花園になっている。そしてそこでは花も食も魅力的である。例えば「フィオーレ定食」は小淵沢の湧水で育った虹マスの香草焼や小淵沢婦人部の手作り豆腐を使った延命豆腐などから成る。

そこからまた登り道を北へ向かい、小海線の線路を越えて周囲の別荘や遊休農地などを眺めながら心地よい木陰の下の小径をまっすぐ辿ると、林が途切れた先の左側に見えてくるのが「スパティオ小淵沢」である。「フィオーレ小淵沢」からは約 1.2km の上り坂である。「スパティオ小淵沢」には「延命の湯」という魅力的な天然ミネラル温泉があるが、郷土色料理「ふるさと薬膳　森樹」や広東料理「山水楼龍淵」なども魅力的である。「森樹」には春は「水仙」「梅」「桜」などの様々な薬膳がある。入口には「薬食同源」の書が飾ってあり、メニューには「小淵沢の郷土料理を基本に、食材から調理方法の食効を見直し、地元の旬の食材をできるだけたくさん使った料理「ふるさと薬膳」」と書かれている。

隣接する建物は「スパティオ体験工房」であり、内部には工房兼展示販売コーナーが並ぶ。また、奥に体験教室の広いスペースがある。さらに隣接する建物は「道の駅こぶちざわ」であり、そこには「小淵沢古代紫米弁当」がある。

以上のように、「食」には人をひきつけ、人を元気にする力があることを小淵沢では実感する。なお、北杜市では最近、食育に「箱膳」を活かす試みを行っている。箱膳の箱にはクリ、サワラ、アカマツ、ヒノキなど地元の資源が用いられ、またその製作にも地元の技能が用いられるので、地域経済の活性化にも寄与するようである。

「スパティオ体験工房」

体験工房内部

Ⅱ－3　アート

地域の人々を結びつける上でアートが大きな役割を果たす事例がある。あるいは、地域の人々の結びつきがアートを促す事例がある。アートは自然の一表現かもしれないが、まちの一表現でもあり、そこで自然とまちが共振する。

Ⅱ－3－1　アートでまちをつなぐ　茨城県取手市

JR 取手駅東口を出ると、駅前広場に見慣れないものが設置されている。スチールの壁に穴が開き、そこに何台もの自転車が突き刺さっている。自転車が消え去って穴だけになっている部分もある。自転車は綺麗な色で統一的に塗られているので、放置自転車ではなさそうだし、個々の人が駐輪する自転車置き場でもなさそうである。これは一体何だろうか。

というところから取手市のまちづくりへの理解が始まる。取手市はアートをまちづくりのコアに据えているのであるが、これは 1999 年に開催された TAP（取手アートプロジェクト）の第 1 回で制作されたアート作品である。題名を「取手リ・サイクリングアートパレット」という。市内の放置自転車を使って作品に仕上げたもので、訪問者はこれらの自転車を使って野外アートを見て回ることもできたらしい（それで穴だけになっている部分があるのかもしれないが、芸術表現かもしれない）。

この作品をつくったのは東京藝術大学先端表現科である。同科が 1999 年に取手市に開校され、それを契機に同科、取手市、市民の協働により TAP が開始されることになった。同年は東口区画整理事業の最終年でもあったことから、その事業の一環として設置されたものでもある。東口から線路に直角にのびる「芸大通り」にもいくつかの「ストリートアートステージ」が設置されているが、これらも TAP により制作されたものである。その TAP は今日まで続く息の長い事業になっているが、アートの取り組みがこれだけ続くのも珍しいであろう。

1999 年の TAP 第 1 回は屋外アート展「リ・

取手駅東口駅前広場の作品
2007 年 7 月撮影（以下同じ）

芸大通りのストリートアートステージ

サイクリングアートプロジェクト」とオープンスタジオから成っていた。後者は取手市内外の作家のスタジオ（アトリエ）を公開して人々に制作の現場を見てもらうという企画であった。そして翌年以降は屋外アート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」とオープンスタジオとが交互に開催されることとなり、2000 年「家・郊外住宅　～家と郊外をめぐる再発見～」、2001 年「オープンスタジオ in 取手」、2002 年「Take Me to the River　～川を知る・川に学ぶ～」、2003 年「オープンスタジオ in 取手「アーティストの仕事場」」、2004 年「1/2 のゆるやかさ」、2005 年「オープンスタジオ in 取手」、2006 年「一人前のいたずら　～仕掛けられた取手～」が開催されてきた。2007 年も企画中である。オープンスタジオは取手駅周辺、北エリア、東エリア、西エリアの 4 箇所に集中的に立地している。2003 年には東京藝術大学取手校音楽環境創造科が新設され、同科の授業の一環に TAP が採用された。2004 年には「TAP 塾」が開設され、市内外からのインターンの教育を行うとともに TAP の活動を支えることとなった。2005 年には「はらっぱ」のある「旧茨城県学生寮」（駅西口）が取り壊し前に「TAP ヒルズ」として展示場所に利用された。TAP により市内の様々な場所がアート作品に変貌し、また、大谷石造りの旧米蔵が農協から提供されて「アトリエ蔵」になったりした。このようにアートが契機となって人と人との協働関係が生まれ、それがネットワークに発展し、モノの再生（コンバージョン等）へも結びついている。市民・大学・市の 3 者がアートでこれだけ長く協働関係を維持しているのは全国でも珍しい。

2005 年には「取手　“芸術の杜”創造プロジェクト」が地域再生計画に採用された。これは、駅西口に「芸術館」、「（仮称）市民情報プラザ」を新設することやそれらと駅とを結ぶ歩行者デッキを整備すること、情報発信機能や利便施設を備えた取手駅東西自由通路を整備することなどを内容としている。2010 年までに整備を完了し、その後は新しい活動を一体的に展開する予定である。

国道ガード下のアート

取手駅西口再開発の計画図と「はらっぱ」（左）

Ⅱ－3－2　アートが生まれるまち　東京都墨田区（向島）

東京都墨田区向島はアート・イベントが行われるまち、アーティストが住むまちとして有名になってきた。2007 年も「向島芸術計画 2007」「向島での現代アート活動･10 年の記録展」「アートまち大学 2007　－地域資源を活かしたアート・まちプロジェクト実践講座－」などアート関係のイベントが目白押しである。並行してアーティストが空き家を再生して住むケースも増えてきてきた。

アーティストが空き家に住む背景には、空き家が多くなっているという事情があり、家賃が安いという事情もあるが、それだけでは説明できないまちの場としての魅力もあるはずである。しかしそのようなまちを機能論だけで見てしまうと、向島は災害に脆弱なまちであり密集した建物ははやく取り壊してしまうべきだ、という一方的な議論になってしまう。そしてその機能論は新しいまちをつくったようで実はまち（の社会）を破壊してきた、という反省が最近では各地で広がり、今や機能論を脱したまちづくりが求められている。向島のアート活動はその試みのひとつとして位置づけることができるが、向島でアート活動が始まる以前には防災対策としてのまちづくりがあった。そしてその防災対策は、スクラップ・アンド・ビルドでもなければ大規模なハード整備でもなかった。向島では人々の手によりきめ細かな事業が行われてきた。話はそこから始めなければならない。

防災事業が開始されたのは「一寺言問地区」である（第一寺島小学校と言問小学校を避難地とする地区）。墨田区の働きかけで 1985 年に地元住民が「わいわい会」をつくったことが事業の契機になった。同会はイベントの開催などを通じて防災キャンペーンを展開する一方、地元の 6 町会とともに「一寺言問を防災のまちにする会」（一言会）を立ち上げ、1987 年に「防災まちづくり計画」を作成して区長に提出した。それを踏まえて区が「一寺言問地区整備計画」を策定し、以後それに基づき住民と区との協働による事業が進められた。

事業でまず取り組まれたのは防火水槽の整

向島の風景 1　2007 年 2 月撮影（以下同じ）

向島の風景 2

備であった。それは「路地尊」と呼ばれるユニークなカタチと複合的な機能（雨水タンク、手押しポンプ）を持つもので、1987 年から 1996 年まで地区内に 6 つ設けられた。また、1990 年以降、住民自らが区と協働で道路の整備を行った。さらに 1996 年には地区集会施設を整備した。これは「一言会」が区長に買い取りを要望した工場跡地で整備されたもので、その設計は住民、区、専門家によるワークショップで議論を積み重ねて決定された。

整備された集会施設や路地尊はそれら自体が独特のアートであり、まちの人々のアート心を感じるが（2006 年秋からは「路地琴」なる水琴窟もまちの各所に登場している）、それらに刺激されたこともあってまちには様々な組織が立ち上がるようになり、1998 年にはそれら組織の連携により「向島国際デザインワークショップ」が開催された。さらに翌年には向島博覧会実行委員会が組織されて 2000 年に「向島博覧会」が開催されたが、まちをアート空間に変貌させてしまうこのイベントを通じてアーティストやまちの人々のネットワークが形成され、翌 2001 年にも「アートロジィ　向島博覧会 2001」が開催された。

2002 年には様々な分野の専門家を中心に「向島学会」が設立された（現在は特定非営利活動法人）。同会の活動内容は「下町のまちづくり・防災・建築・アートに関わる様々な団体、個人とのネットワークをフル活用し、江戸以来の歴史と文化を継承した地域資源の収集・提供（アーカイブ）と、地域活性化のためのプロジェクトを提案・推進」することと説明されており、これまで様々なアート・イベントを主催、後援してきている。2006 年度には新たに「向島アート・まち大学」も立ち上げた。

なお、防災事業は 1996 年に一応の完了を見たことから、「一言会」は路地尊等の管理、啓蒙活動、路地園芸調査等の地道な活動に移行している（墨田区が 2007 年 2 月に設けた「いっしょにネッと」にも登録している）。

向島五丁目の路地尊

一言言問集会所と広場